

救急救命士のエピペン®研修等環境の実情

園部まり子¹⁾ 長岡徹¹⁾ 坂口智恵¹⁾
山口かおり²⁾ 今井孝成³⁾

- 1) NPO法人アレルギーを考える母の会
- 2) ひらつか食物アレルギーの会
- 3) 昭和大学医学部小児科学講座

第60回日本小児アレルギー学会学術大会（令和5年11月19日）

**第60回日本小児アレルギー学会
COI 開示
筆頭発表者名 園部まり子**

**演題発表に関連し、開示すべきCOI 関係にある
企業などはありません。**

(背景)

平成21(2009)年から救急救命士によるアドレナリン自己注射薬（以下エピペン®）投与が可能となり、年間250～300件程度が投与されている。



総務省消防庁「救急救助の現況」

(目 的)

救急救命士のエピペン[®]に関する研修等環境の実情を明らかにし、業務をより効果的に遂行できる環境を整える。

(方 法)

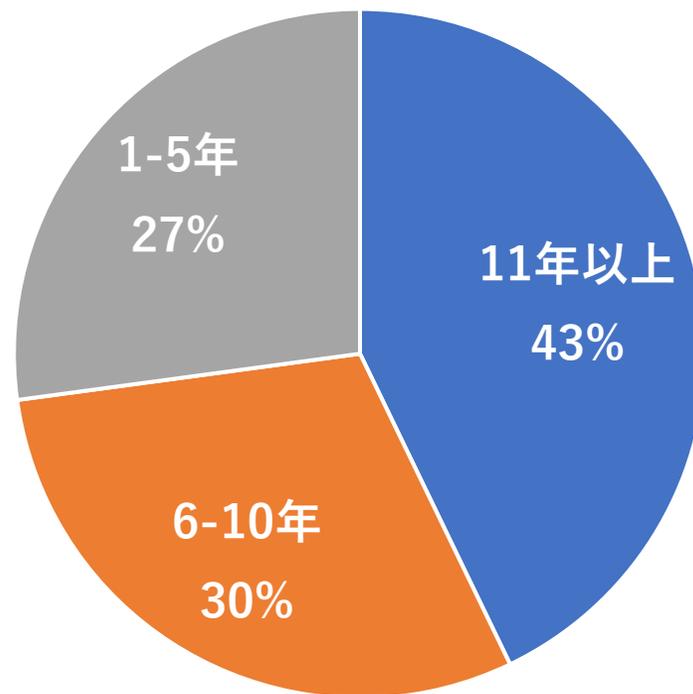
調査対象：令和4年度にWeb開催した「食物アレルギーの最新知識と緊急時対応の研修会（学校・保育所、救急隊向け）」に参加した救急救命士。

研修会終了後に調査協力を求めるアナウンスを行い、Webアンケートに回答してもらった。調査項目は、練習や研修環境と実務、エピペン[®]投与に関する印象等とした。

結果 |

回答数 70人

救急救命士としての勤続年数

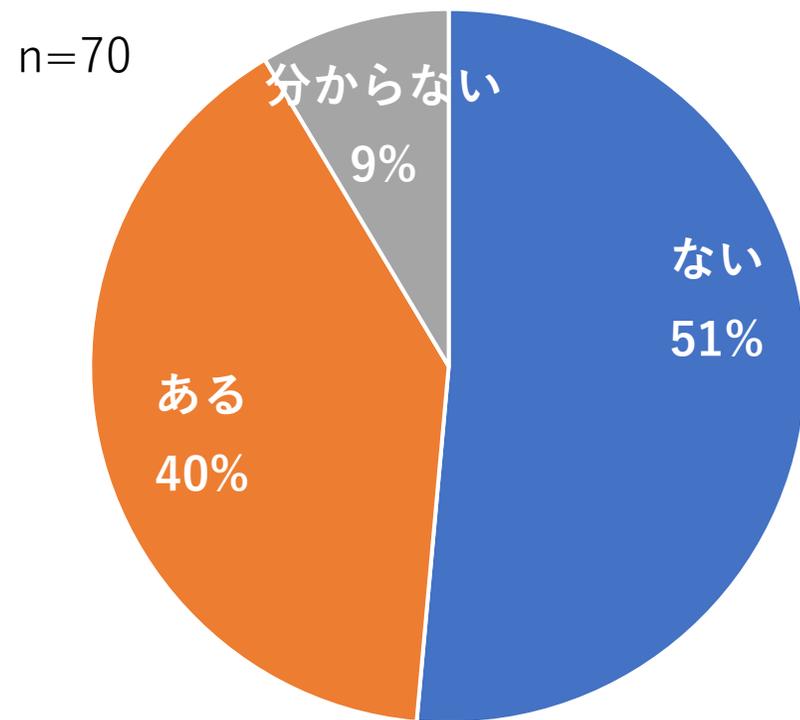
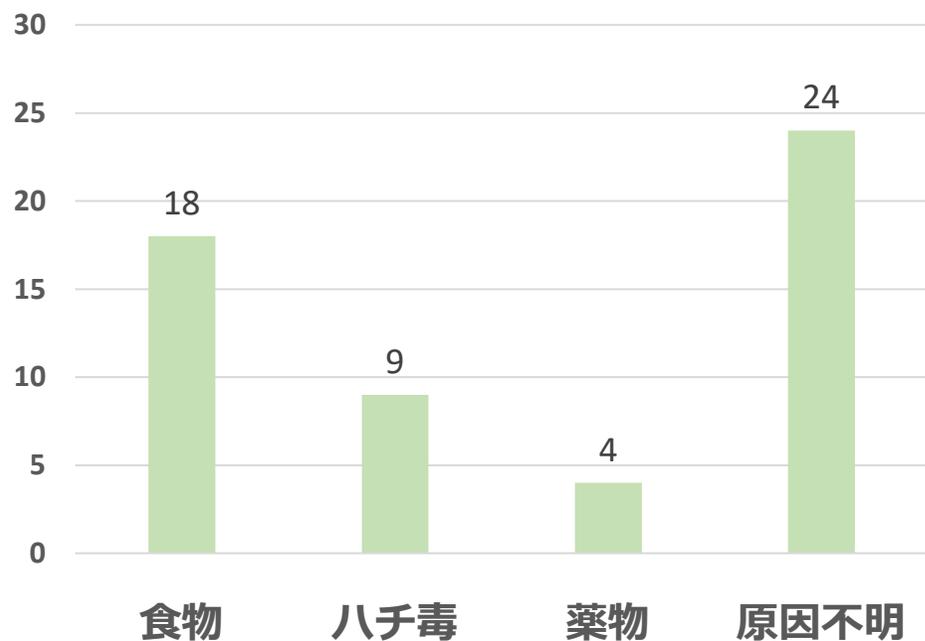


結果 | エピペン®使用に関して

過去3年間に

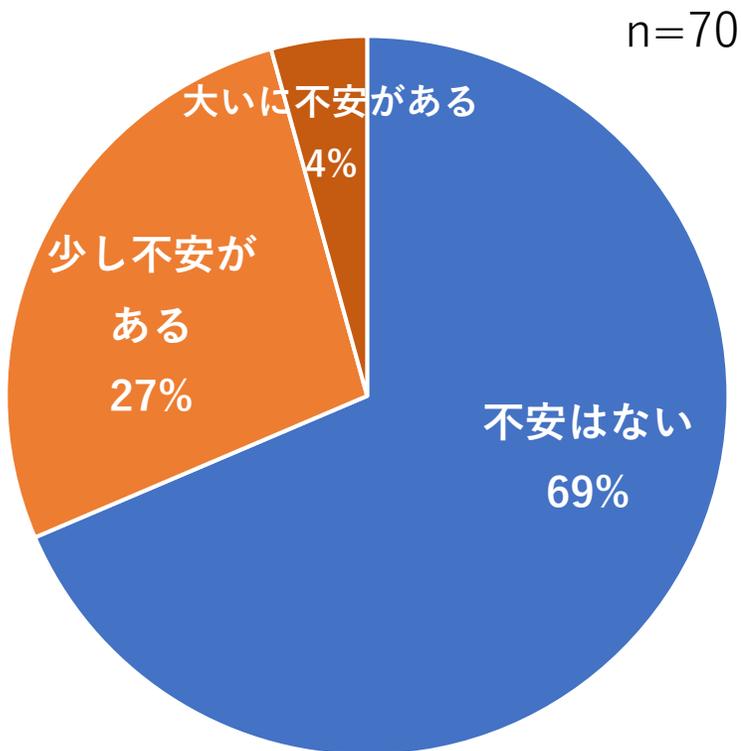
- ・エピペン®を使用した患者の搬送経験あり 7人
- ・エピペン®を自身で患者に投与した経験あり 1人

エピペン®使用後搬送患者の原因物質



「エピペン®」があれば良かったケースの経験

結果 | エピペン®使用に対する不安



「エピペン®」を使う不安

不安の理由(n=18)

経験がない、または経験不足で不安 14人

副反応が不安 2人

手技、タイミング、周囲の理解不足が不安

それぞれ1人

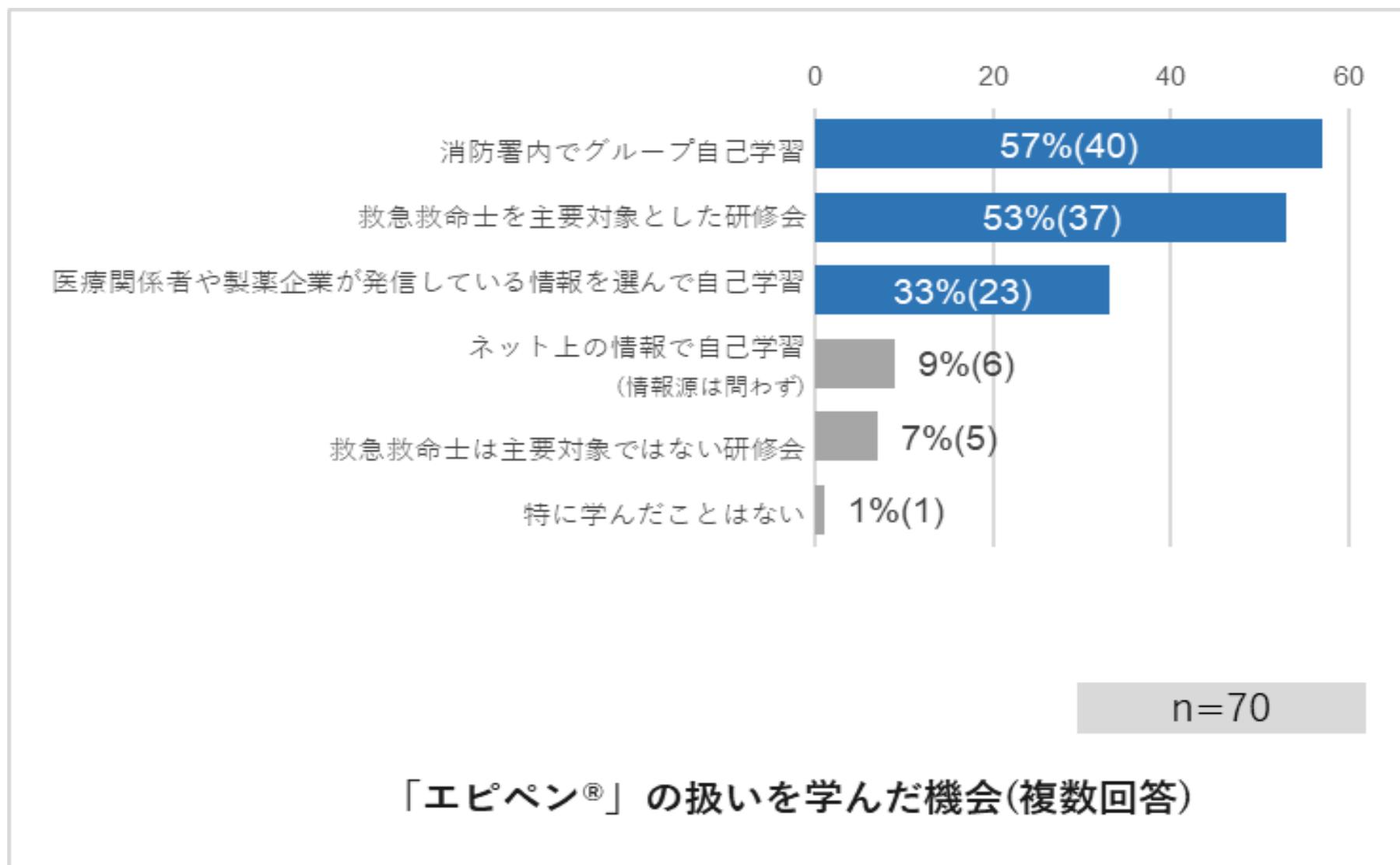
結果 | エピペン[®]使用に対する不安

勤務年数群ごとのエピペン[®]使用に対する不安

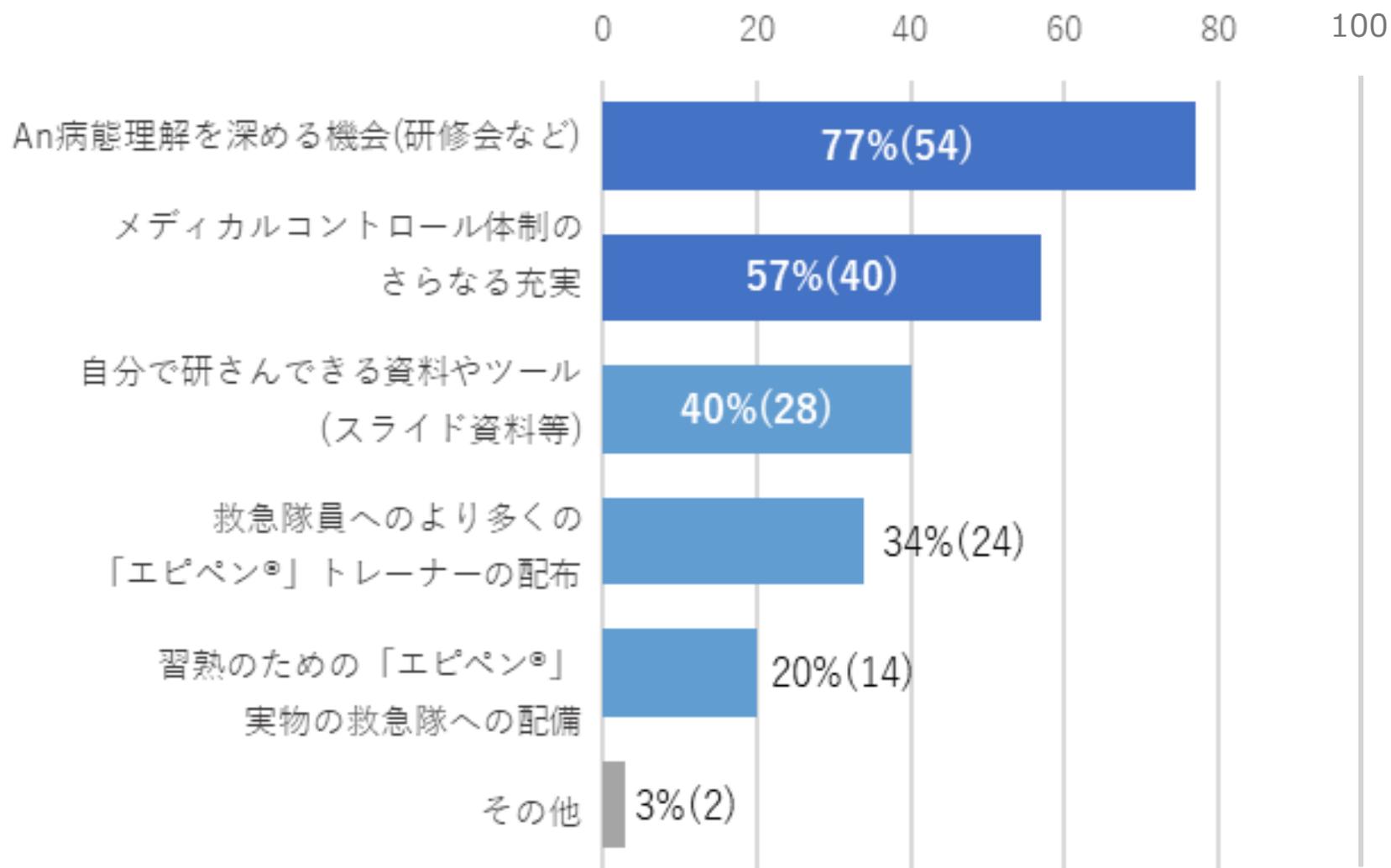
勤続年(n)	不安がない	不安がある	p値
5年以下 (19)	12 (63%)	7 (37%)	0.049
5-10年 (21)	11 (52%)	10 (48%)	
11年以上 (30)	25 (83%)	5 (17%)	

χ²乗検定

結果 | エピペン®の習熟環境

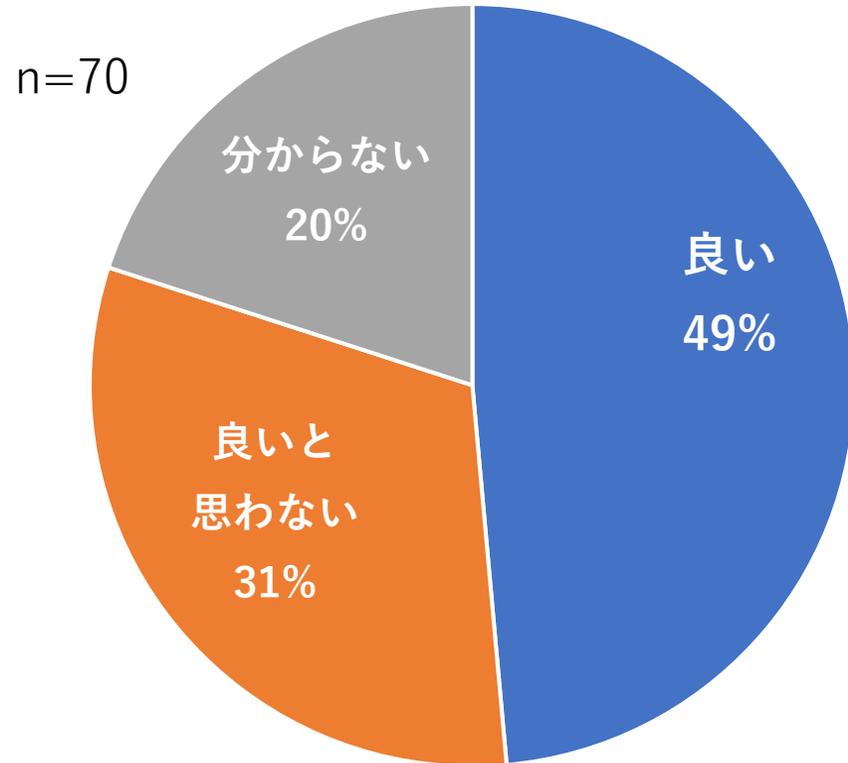


結果 | エピペン®の円滑な運用のために



An: アナフィラキシー

結果 | 救急車へのエピペン®搭載に関して



「エピペン」®を救急車に
搭載した方が良いか

「良いと思う」理由 (n=38)

「エピペン®は早期投与が有効である」、「迅速な対応が可能である」、「エピペン®しか改善させるものがない」、「救急救命士はアドレナリンを筋注、静注できない」、「取り扱いが簡単である」

「良いと思わない」理由 (n=16)

そもそも不要 5人、管理が不安 4人、判断が不安 4人、メディカルコントロールの体制が未確立 2人、資金的に難しいだろう、投与量が問題

(考 察)

・救急救命士を対象としたエピペン®投与などに関する報告はこれまでになく、今後の取り組みを検討する上で有用な結果が得られた。

1. エピペン®の円滑な運用に関して

エピペン®に対する経験不足や不安などを原因とする運用の障害が一定の割合で認められた。

2. エピペン®の救急車への搭載に関して

アナフィラキシーやエピペン®に対する理解不足や不安などから、搭載に対して否定的な見解が見受けられた。

→両者を解決するためには、救急救命士を対象としたアナフィラキシーやエピペン®に関する普及啓発事業（研修や資材開発など）が求められる。